

平成20年度

富山城跡

現地説明会資料

2009年3月25日 (水)

富山市建設部公園緑地課
富山市教育委員会埋蔵文化財センター

富山城の歴史概観

◆富山城を取り巻く環境

富山城は、旧神通川と鮎(いたち)川の合流点の西にあり、標高約10mの自然堤防上に立地します。江戸時代以前は神通川が富山城のすぐ北側を流れていました(次ページの図)。当時の川幅は190mほどあったようです。神通川は明治までこの流れをとっていましたが、洪水の被害が度々生じたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越(はせこし)工事が行われました。工事により、富山城の北を流れていた神通川は廢川地となって埋め立てられ、県庁や市役所が建つ県の中心地となりました。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめています。

◆中世(戦国時代)の富山城

最初に城を構えたのは、古記録では放生津(ほうじょうづ)を本拠地とした越中守護代神保長職(じんぼながもと)と伝えられ、天文12(1543)年のことと考えられています。その後、上杉謙信の攻略(永禄3年)、一向一揆の占拠(元亀3年)と上杉の攻略(天正元年)、神保長住の進出(天正6年)、長住の幽閉(天正10年)、佐々成政の入城(天正11年)といった出来事があり、天正13(1585)年に佐々成政を降ろした豊臣秀吉により富山城は破却(はきやく)されます。

神保期の中世富山城の姿を描いたものに、江戸初期に成立したとみられる往来物『富山之記』があります。誇張したとみられる記述が多いものの、三方を二重の濠で囲んだ堅固な城で、西の神通川を搦手(からめて)とした等の記述があります。

中世富山城の位置については、『富山之記』による描写から、星井町の西側に存在したとする説と、現在の城址公園の位置にあったとする説の2説がありました。平成14年度から着手した城址公園の試掘確認調査で、戦国時代後期の堀跡(薬研堀)・鍛冶工房跡、陶磁器類・茶臼などが出土したことから、中世富山城は現在の城址公園に存在していたことがほぼ確実となりました。

◆近世(江戸時代)の富山城

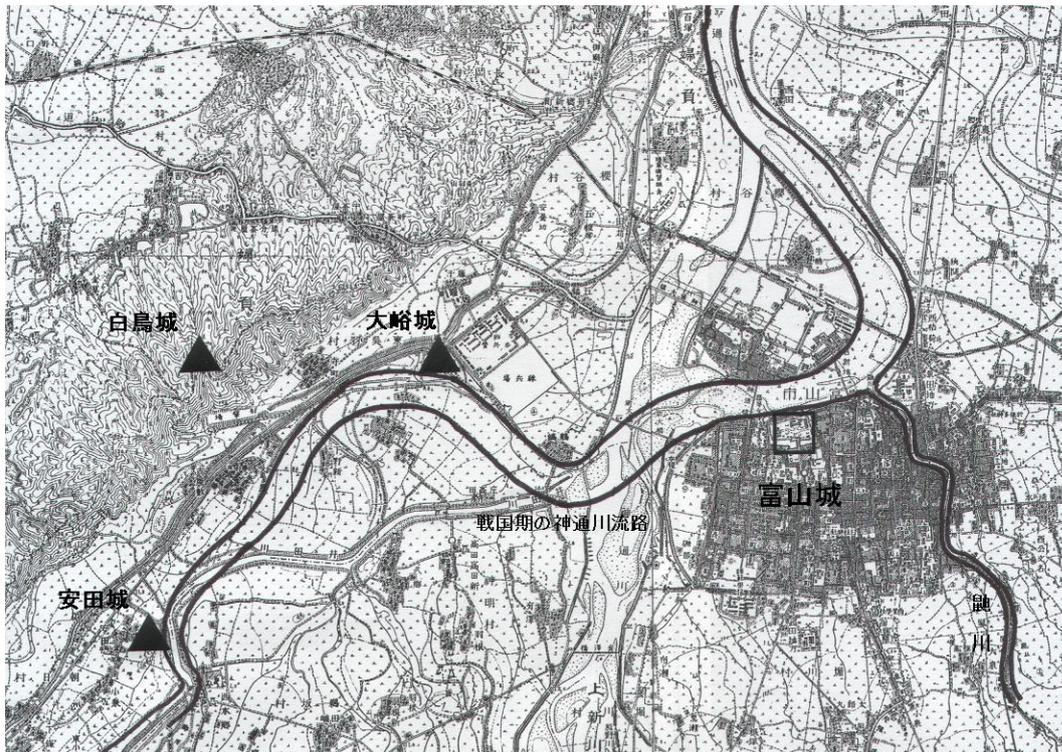
慶長2(1597)年に富山城に入った加賀第2代藩主前田利長(まえだとしなが)は、翌年家督相続のため金沢に移りましたが、慶長10(1605)年、隠居により再び富山城に入ることとなりました。このときに大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備されました。ところが、慶長14(1609)年、大火によって富山城は焼失し、その後は再建されず、元和元(1615)年、一国一城令により廢城となりました。

寛永16(1639)年、富山藩10万石が成立します。初代藩主となった前田利次(まえだとしつぐ)は、廢城となっていた富山城を居城とし、幕府の許可を得て本格的な整備を行いました。寛文元(1661)年に幕府から修理の許可が下り、本丸御殿は年内に完成しました。本丸御殿は正徳4(1714)年に焼失しましたが、天保4(1833)年に再建されます。

◆近代（明治時代）以降の富山城

明治 6（1873）年、明治政府により廃城令が出されます。堀は埋め立てられ、土塁は崩されるなどして富山城は廃城となりました。本丸御殿は県庁として使用されましたが、明治 32 年に起こった大火によって焼失しました。県庁は翌年、城址内に新築されます。しかし、昭和 5（1930）年再び失火により全焼し、その後、松川北側の現在の場所に建て直されました。

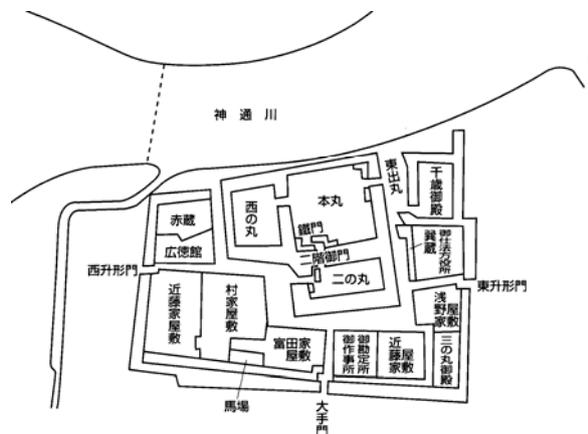
昭和 14（1939）年、富山城址は都市計画公園となります。昭和 29（1954）年の富山産業博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に天守閣が建設され、現在は富山市郷土博物館として利用されています。



戦国期の城館と神通川の復元 (明治 44 年地形図をもとに古川知明氏作成)



越中国富山城絵図 延宝 5 (1677) 年



安政期頃の富山城配置図

(『富山城の歴史』より)

発掘調査のあらまし

1. 調査原因：富山城址公園整備に伴う発掘調査
2. 調査面積：118 m²
3. 調査期間：平成21年2月23日～平成21年3月31日（予定）
4. 調査主体：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
5. 発注者：富山市建設部公園緑地課
6. 発掘調査のあらまし

富山城は、最初に城が築かれた戦国時代から現代までの層が何重にも重なっています。もっと古い室町時代や平安時代の層が認められる部分もあり、富山城の成立前にも人が活動していたことがわかっています。

発掘調査は、新しい時代の層から少しずつ掘り下げていき、各時代の遺構・遺物を確認していきます。今回は、明治時代の層からはじめて江戸時代の層まで確認しました。明治時代の層では石組水路があります。また、江戸時代後期～明治まで建っていた本丸御殿が焼けた際、その廃棄物（瓦・壁等）を埋めた穴も見つかっています。江戸時代の層では、土を固めて整地した面がありました。整地面は、後の時代に大規模な掘削が行われて削られています。

また、かわらけや陶磁器、五輪塔など多くの出土遺物がありました。

発掘調査の成果

◆石組水路

調査区を東西に横切っています。水路は幅約70 cm、深さ約40 cmで、両側に石を積んでいます。石の積み方は両側で違って、南側は川原石を3段程度、垂直に積んでいるのに対し、北側は、半分に割った川原石を、割った面を表にして斜めに積んでいます。石積の一番上には大きめの石が乗っている部分があり、水路に沿って石の端部がカットされています(次ページ左上の写真)。この石は本来、全体に並んでいたかもしれませんが、削られてしまったためか調査では6石しか確認できませんでした。



水路の全景



北側の石積（半分に割った石を斜めに積む）

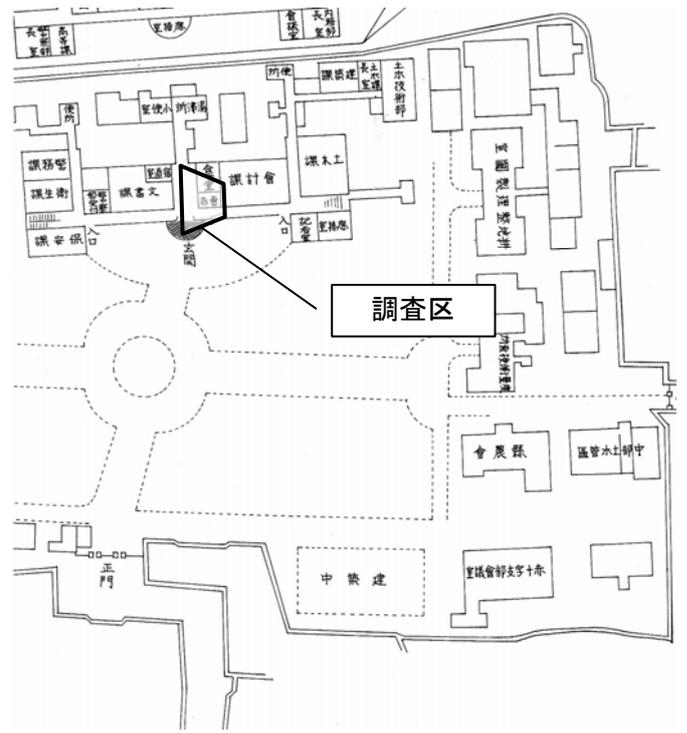


石積の一番上に石を並べている

また、水路と直交するように石を立て並べた石列がみられます。ちょうど水路のところで途切れているので、水路と一体で造られたと考えられます。

水路が使われたのは明治時代と考えられます。明治33年に建て替えられた県庁に伴うものではないかと推定しています。

この県庁の図面に調査位置を重ね合わせてみると、調査区は県庁入口近くの食堂・売店の辺りになります。建物の地下に走っていたとは考えにくいので、図に多少の誤差があると考慮して、食堂裏側の建物沿いに延びていた排水路かもしれません。



富山懸廳構内一覽（富山県史より引用）

◆焼けた瓦や壁等が捨てられた穴

調査区北部では赤く焼けた土や炭を大量に含む穴が見つかりました。穴は東西幅3m以上、深さ0.8m以上で、北側へさらに広がります。穴の中からは瓦、土壁とみられるもの、釘、炭化材等、建物に伴う部材が出土し、多くが焼けています。

この穴は明治32（1899）年に県庁（旧本丸御殿）が焼けた際、火災によって大量に生じた廃棄物を捨てた穴と考えられます。穴を掘って埋めて処分したのでしょう。

この焼けた本丸御殿は、天保4（1833）年に建てられました。穴から出たものが確実に御殿に伴うものなら、出土品を調べることによって、これまで主に絵図や写真でしか分からなかった御殿の様子がより詳しくわかってくると考えられます。



穴から見つかった瓦等の出土状況



穴の断面

◆土を固めて整地した面

調査区の中央部では土を固めて整地したとみられる面が見つかりました。整地は、質の異なる土を4～5層ほど薄く盛り土して締め固めています。整地面では土坑が4基掘られていました。固く整地していることから、城に関係する何らかの施設が存在していたと考えられます。整地された時期は明確ではありませんが、寛文初年(1661年)の富山藩改修期に行われた可能性があります。

整地面は本来、もっと広範囲に広がっていたと考えられますが、後の時代に大規模な掘削が行われて周囲が削られたため、中央付近に島状に残っているのみでした。



整地面 (中央の高くなっている所が固い面)



整地層の断面(質の異なる土を薄く盛り土している)

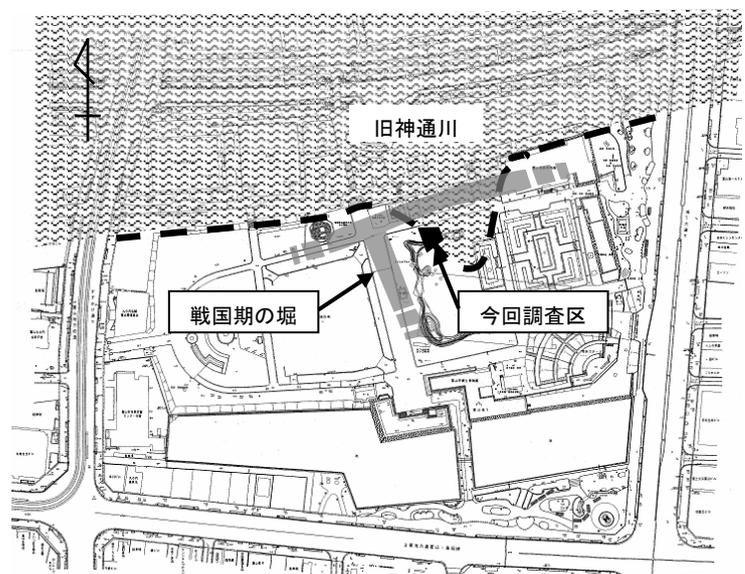
◆さらに下層には何がある？

今回の調査は、公園整備で工事が及ぶ深さまでの調査にとどめています。では、さらに下層には何があるのか、過去に行った周辺の調査から推測してみたいと思います。

今回は江戸時代までの層しか掘っていませんが、遺物はそれより前の戦国時代のかわれけ等も含まれます。下層におそらく戦国時代の遺構・遺物があるのでしょうか。江戸時代以降の造成によって戦国時代の遺物が掘り返され混ざったのだと考えられます。

西側で試掘確認調査を行った成果によると、あと40～50cmほど下で戦国時代の面があると推定されます。

また、調査区の東側で行った試掘確認調査では、今回の江戸時代整地面より2m以上掘ってもまだ下に層が続くようでした。このことから本調査区の東側は、大きく谷状に抉れた地形があったのではないかと推測しています(右図)。室町時代以前までこうした地形があり、戦国時代、ここに富山城を築城する際に埋め立てられたと考えられます。



◆江戸時代の焼塩壺

右の写真は、今回の調査で出土した江戸時代の焼塩壺と呼ばれる素焼きの土器です。器壁は厚くて、重みがあります。その名の通り、土器の中に粗塩を入れ、焼くことによって精製した塩を得るものです。その後、塩は土器に入れたまま流通・販売され、そのまま食膳にのぼることもあったようです。江戸時代の食卓塩といえるかもしれません。

今回出土したものにはありませんが、焼塩壺の中には「天下一堺ミなど藤左衛門」や「泉州麻生」といった刻印があるものがあります。産地や生産業者を示しているのでしょう。

焼塩壺は京都を中心に西日本で数多く出土しています。また、出土する遺跡は、京都では公家・武家屋敷跡、寺社跡や料亭跡等に集中するほか、その他の地域では城跡から多く出土しています（渡辺 誠 1987「焼塩」『講座・日本技術の社会史』第二巻）。身分の高い人だけが使えるものだったと考えられます。富山城では過去に1点見つかりますが、県内では他に見られず、珍しい遺物といえます。



焼塩壺

※現在調査中であり、今後の調査や検討次第によって本資料の内容は変更する可能性があります。

平成 20 年度 富山城跡現地説明会資料

発行 2009年3月25日(水)

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

富山市愛宕町1-2-24

TEL 076-442-4246

富山城の調査・研究成果をホームページで公開しています。
富山市埋蔵文化財センターHP 「富山城研究コーナー」をご覧ください。
検索:「富山城研究」GO